

真澄

MASUMI
No.30



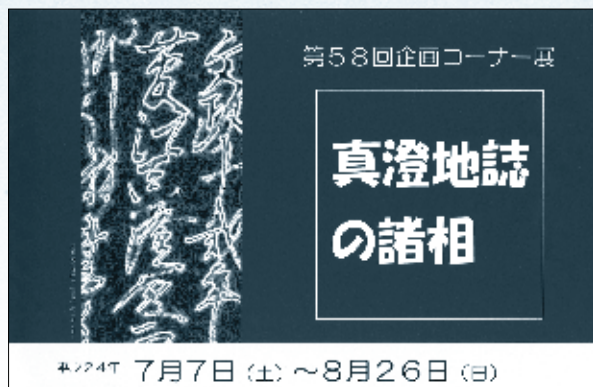
出羽國平鹿郡八澤木郷本
根阪系杉山と云ふも
も後うきお杉群ありしは
上より世風一字の佛刹あり
清光院とて修験者其昔ハ
羽黒派中一世別行山依り
今東山の流と云其補任
と云家譜といひ回禄失
皇祖の由來を説く傳
延寶刊金剛院中興の祖
也其補任云院號
授與金剛院右任先例ハ
狀仍如件寛永寺學頭
兼羽黒山執り別當僧
補任羽州仙北八幡郷金
子藥王院元禄九丙子年八月五日
羽黒山執行三金剛院寶曆



菅江真澄は、秋田に定住するようになってからの後年、旅の集大成として地誌編纂に取り組みました。それまでの著作であった日記形式から地誌形式への転換はスムーズに行われたわけではなく、真澄とさえども試行錯誤を繰り返したことが、現存する資料から読み取ることができます。

真澄の地誌は、全国的な地誌編纂の流れの中に位置づけることができます。真澄は当初、秋田六郡の地誌編纂の計画を立てました。しかし、実際に完成したのは平鹿郡全十四巻だけで、次に取り組んだ仙北郡の地誌の完成間近に真澄は亡くなってしまいました。

展示では、真澄の地誌編纂の計画から編纂までの全体像を紹介するとともに、地誌の草稿、地誌に関わる文書や文献を紹介するなど、真澄による地誌編纂の有り様の一端を紹介しました。



真澄の地誌は、全国的な地誌編纂の流れに位置づけることができます。古風土記（八世紀初め編纂）や各藩の地誌編纂を受けて、幕府は享和三年（一八〇三）に地誌調所を設置しました。その内命を受けて、『新編会津風土記』（文化六年（一八〇九））などが新たな形式で完成しています。その情報も秋田藩を地誌編纂へと動かしたものと考えられます。

1 地誌編纂の背景

「風土記」が伝わる国

■ 現存する「風土記」
○ 「風土記」逸文が伝わる国



説明地図は、青森出版社『風土記』による。

地誌とは

ある地域の自然・社会・文化などの地理的現象を記述してその地域の特色を示したもの。日本では古代の風土記が最古のもので、郷土誌・府県誌・市誌などがある。（精選日本国語大辞典・小学館）

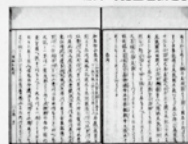
●「風土記」の編纂

朝廷からの風土記編纂の下命…『続日本紀』和銅6年(713)5月甲子条

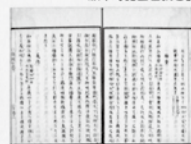
- (1) 国名・郡名・郷名に好い字を付けよ。
- (2) 郡内に産する鉱物・植物・動物などで有用な品目を挙げよ。
- (3) 土地の肥沃状態。
- (4) 山川原野の名の由来。
- (5) 古者の代々伝えてきた旧聞異事。

※ 三河国逸文は学術的に認められていません。

版本『諸国名義考』



版本『諸国名義考』



文政5年(1822)の日記
『筆の山口』に引用

地誌『月の出羽路仙北郡一』
に引用

●江戸時代の各藩、領国経営のための地誌編纂

南紀略志(和歌山藩、1651年)、懷橋談(出雲十郡記)(島根藩、1654年)、会津風土記(会津藩、1666年)、芸備国郡志(広島藩、1663年まで)、五畿内志(1736年)など

●幕府主導の地誌編纂

享和3年(1803)、幕府学問所昌平黉に地誌調所設置 二各藩に地誌編纂の内命

- ① 本文を仮名交じり文で書くこと
- ② 項目別ではなく、村落毎に記述する形式にすること
- ③ 絵図など図版を入れること

新編会津風土記(会津藩、1809年)、白河風土記(白河藩、1804年頃)、水府志料(水戸藩、1807年)、甲斐国志(1814年)、飛州志(飛騨国、1829年)など

秋田藩の編纂内命

- ※藩校助教・那珂通博からの依頼
『軒の山吹』文化8年5月12日
- ※方法論的な失敗、藩主義和の死去(文化12年)による中断
- ※新藩主義和初任府に向けた編纂再開

秋田藩の地誌(私撰)

参考

真澄による
地誌編纂

影響

名所記(真澄地誌に引用したもの)

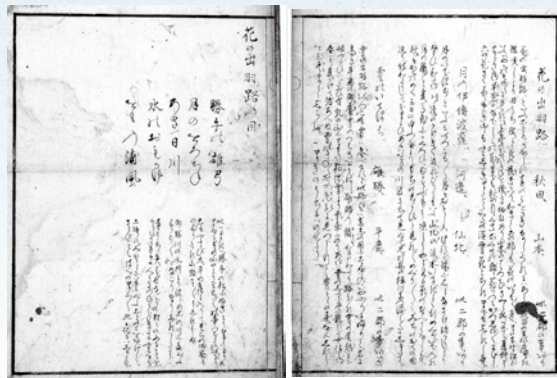
六郡郡邑記(岡見知愛、1743年以降)
久保田領郡邑記(近藤南寛、1799年から3年)
秋田風土記(淀川盛品、1815年)

都名所図会(1780年)、和泉名所図会(1796年)、東海道名所図会(1797年)、伊勢参宮名所図会(1797年)、木曾路名所図会(1805年)

本図は、白井哲哉著『日本近世地誌編纂史研究』(思文閣出版、2004年)の研究成果に基づいた次の論考の一部を図式化しています。「真澄地誌の成立過程に係わる考察～那珂通博との会見、《花の出羽路の目》再考～」(『真澄研究』第9号所収)、「誰がための地誌編纂か～四月十日高階貞房宛書簡の再読を通して～」(『真澄研究』第12号所収、いずれも当館発行、松山執筆)

2 地誌の構想と実際

真澄は秋田藩領の六郡について、「雪月花」を冠した地誌にまとめようとした。六郡についてそれぞれに手掛けた痕跡はあるものの、結局、地誌として完成あるいは完成に近づけたものは、平鹿郡（全十四巻）・仙北郡（二十四巻、第二十五巻は草稿）・雄勝郡（草稿四巻）の三郡に止まりました。



「花の出羽路の目」

館蔵『花の出羽路』所収部分の表裏

花の出羽路（秋田郡、山本郡）

・春の桜に限らず四季を通じた花が美しい。
月の伊傳波遅（河辺郡、仙北郡）

・沢水から雄物川に至るまで水面の月が美しい。

雪のいてはぢ（雄勝郡、平鹿郡）

・雪が深く山の残雪までもが印象的である。

※雪・月・花は、三種の景物の取り合わせを表す語として使われている。

3 試作から様式確定へ

真澄による地誌編纂は順調に行われたわけではなく、秋田郡に関しては日記を組み合わせたものにしてしまうと失敗したと考えられます。その後、日記形式と地誌形式の混在した時期を経て、文政七年（一八二四）の平鹿郡の地誌編纂から、ようやく今日見られる地誌の様式になりました。

※地誌の試作段階としては、秋田郡と雄勝郡に関する著作に見られる。秋田郡では、地誌形式と日記形式が混在したものが《花のいでばぢ松藤日記》（八峰町・山崎照雄氏蔵）に見られ、図絵は《勝地臨毫秋田郡》として独立している。また、雄勝郡に関しては、《雪の出羽路雄勝郡》（写本四冊と真筆本一冊が伝わる）に地誌形式と日記形式が混在しており、図絵は《勝地臨毫雄勝郡》として独立している。秋田郡、雄勝郡のいずれもが、文化十年（一八一三）から同十二年頃にかけての巡村に基づく著作と考えられる。

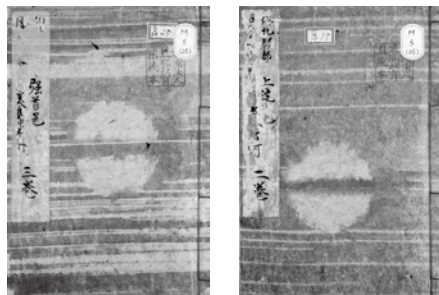
4 地誌の編纂

文政七年（一八二四）から巡村調査が始まった平鹿郡は、全十四巻として完成しました。その後、文政九年から取り組んだ仙北郡は、第二十四巻までが出来上がったものの、第二十五巻は草稿で残されることになりました。真澄による地誌編纂は、文政十二年（一八二九）の死によって終わることになりました。

※真澄の地誌は、親郷——寄郷——枝郷の関係を示しながらまとめられている。平鹿郡

5 草稿本と清書本

及び仙北郡の各巻が示す親郷と寄郷の関係を地図にまとめてみると、当時の親郷制の地域的広がりを知ることができる。地誌の清書本は、藩校明德館に献納されましたが、草稿本も作成されていました。仙北郡の地誌には、「近本」と呼ばれる草稿がありました。それらは戦災で焼失しましたが、当時から不明であった二冊だけが、大館市立中央図書館蔵本として現存します。内容の比較を通して清書本に至るまでの工夫を知ることができます。



近本第2巻の「仙北郡上淀川邑」（写真右）が清書本第1巻（《月の出羽路仙北郡一》）の後半部分、近本第3巻の「仙北郡強首邑」（写真左）が清書本第2巻（《月の出羽路仙北郡二》）の前半部分になっている。

二点とも大館市立中央図書館蔵
（県指定文化財『菅江真澄著作』のうち）

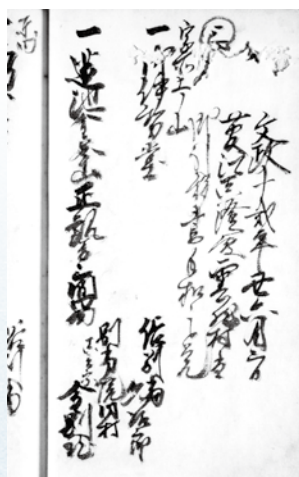
6 地誌データアラカルト

ある事柄について地誌を拾い読みしてみると、一村一村を紹介した地誌の内容とは異なる横断的な面が見えてきます。展示では、仙北郡の執筆日（傍証資料を含む）、平鹿郡の村構成を拾い出して紹介しました。

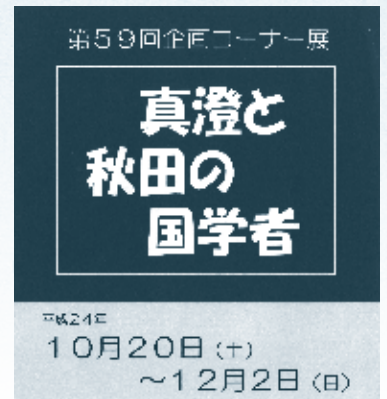
7 地誌関連の文書と文献

※平鹿郡の村構成の数字を拾い出してみると、整合性の取れないものが見受けられる。それは、地誌が各村の肝煎の協力のもとにまとめられ、数字については、書き上げ文書をそのまま写したためと考えられる。

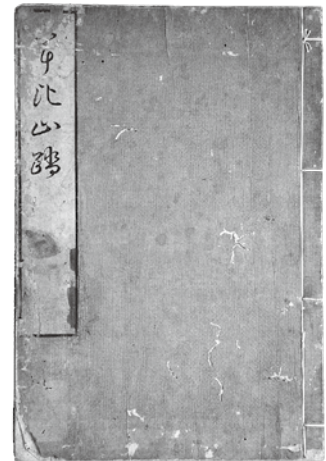
真澄の地誌編纂に関しては、献納された地誌だけではなく、真澄の巡村調査のようすを知ることができる文書類があります。また、現在は不明となっていますが、以前に翻刻された文書類もあります。それらを拾い集めていくと、地誌編纂の実態ばかりではなく、真澄の実像が浮かび上がってきます。



諸御用万願書控（仙北市梅沢・大石淳氏蔵）
地誌編纂にあたって、梅沢村（旧田沢湖町）とその寄郷の肝煎らが提出した文書の控え。主に、村内にある社とその別当、村内の家数や馬数などが、「菅江真澄殿」宛に報告されている。内容は、《月の出羽路仙北郡二十六》となるべきものだが、真澄の死によって地誌としてまとめられることはなかった。翻刻／『田沢湖町史資料編』第七集

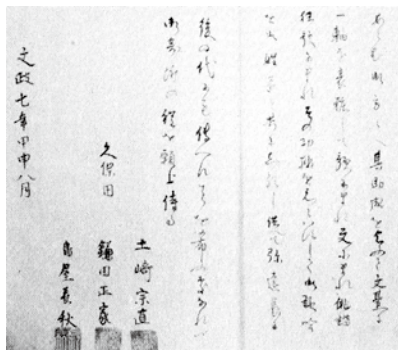


国学とは何か。



うひ山ぶみ(本居宣長著、版本、館蔵)

『古事記伝』が完成した寛政十年(一七九八)、弟子たちの求めに応じて著した国学入門書。国学が扱う範囲、学問を志す者の心構え、さらには、学問のあるべき姿や研究方法について、総論を述べたあとで各論を詳述している。



奉加帳の実際

『菅江真澄と秋田』(昭和53年、菅江真澄翁百五十年祭実行委員会)掲載の写真

鳥屋長秋など国学の興隆を願う秋田の人たちが、精神的な拠り所とするために本居宣長の木像を制作することにした。その寄付を募る奉加帳の趣意文である(所在未確認)。朝日に映える山桜の意匠は、宣長が六十一歳自画像に書き添えた歌に基づく。

『うひ山ぶみ』に示された国学

目的…「道」を学ぶ(神が支配したいにしえの日本像)。

理由…皇室が無窮(永遠)ということは、上下が争ったことがないということ。で、日本の道が正しい証拠である。漢意(からこころ)の横行で、異国の厳格な道が支配している。道という教説はない。

内容…本来は我が国に関する学問すべてであるが、特に「神学」「有職」「歴史」「歌学」を指し、古事記・日本書紀・万葉集・古語拾遺などの古文獻を学ぶ。

方法…文獻に基づく実証を必要とし、解説は古文獻や同時代の文獻に基づくべきであり、無批判な古今伝授の類を排除する。古い時代の歌や文章の実作を重んじる。

※白石良夫著『全訳注うひ山ぶみ』(講談社学術文庫)を参照した。

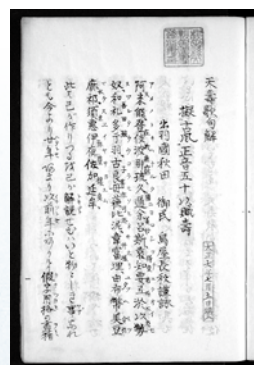


本居宣長木像
(秋田市八橋・日吉八幡神社)

鳥屋長秋(とやのながき)

(?~天保十二年(一八四一))

鳥屋長秋は、後年、真澄の養子になったと語られるほど、真澄と親しく交流した人物です。長秋は藩の飛脚方御用でしたが、向学心から勉学を重ね、文政八年(一八二五)に開設された藩校明德館和学方では、副取立係格に登用されました。古事記や源氏物語の講義を受け持ちました。



天寿歌句解
(アメノホキウタノツカヒノキゴト)
(鳥屋長秋著、写本、秋田県立図書館蔵)

弘法大師の作とされる「いろは歌」(四十七文字)と同様、五十音(五十文字)を一度ずつ使った寿歌を作り、その解説を詳しく行っている。五十音図のうち、ヤ行を「やいゆえよ」、ワ行を「わあうゑを」として、ん(「ん」は音とは見なされない)以外のすべての音を使っている。音声言語に関する関心は、国学者の一つの傾向であり、現在の国語学につながっている。



菅江真澄墓碑の長歌
(鳥屋長秋詠、墓碑所在地・秋田市寺内)
真澄の業績について、格調高い万葉風の長歌を詠じている。



第60回企画コーナー

伝説伝承 そぞろ歩き

平成25年 2月9日(土)～3月24日(日)

県中央部

■二つの御腰掛石

人間の力ではどうすることもできない巨石、それに珍しい形や色をした奇石には、石にまつわる伝説が生まれやすい傾向があるようです。真澄は、現在の秋田市東部で御腰掛石の伝説を書き留めました。(現存かは不明)

神の御腰掛石…《勝地臨毫秋田郡一》

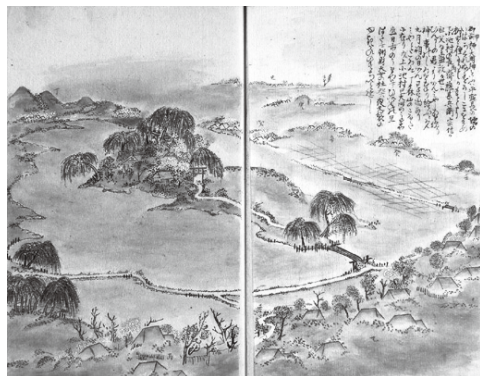
田中村の田の中に、神の御腰掛石がある。ここに来ると、早乙女はすぐに神楽歌を謡うのだが、神楽歌を聞いたこともない早乙女も突然に謡い出すという。

佐竹義隆の御腰掛石…《花のしぬのめ》、《花のいではち松藤日記》

秋田藩第二代の佐竹義隆が鷹狩りの時、御腰掛石に座って休んでいた。一人の老人が、年貢米を牛に付けて久保田から帰る途中でであった。義隆が訳を尋ねると、良くない米だといって昨日も今日も米役人が受け取らなかつたと答えた。次の日、御蔵にある良い米を米役人に出させて、老人の米と比べさせてみると、老人の米が良い米であると言う。老人の米は御試米とされた。義隆が腰掛けた石は、濁川村に今もある。

■浦城三浦氏の最期

浦城三浦氏の最期にまつわる伝説は、真澄が折に触れて書き記しています。ただし、口承や書物からの引き写し(書承)により、細部は異なっています。《雪の道奥雪の出羽路》(全集第三巻313頁)と《かすむ月星》(全集第四巻84頁)では、三浦義豊とその子義包の最期の物語を記録し、《ひなの遊び》(第六部)では、「柳の社のふること」として、浦城主の奥方が浦城滅亡の折に安産の神として祀られることになったことを記しています(全集第四巻182頁)。さらに、随筆《久保田の落ち穂》「みさきの柳神」では、地域に伝わっていた「秋田軍記」の内容を含めて記録しています。



《ひなの遊び(第六部)》の図絵
御前柳神社(八郎潟町小池)

※所蔵名のない図絵は、館蔵写本のものです。

浦山城主三浦兵庫頭盛長の妻が、落城の時、身重の体で小池村に逃げてきた。村の女たちが世話をしたが、亡くなってしまった。亡くなる間際に、世話をしてくれたお礼に安産の神になって女たちを守ろうと言った。村人たちは塚を築いて柳を植えた。柳は枯れてしまったが、別の柳を植えて、それを御前柳と呼んでいる。

三湖伝説

■十和田湖…《十曲湖》

で真澄は、『三國伝記』や地元には伝わる伝説を書き残しています。難蔵法師、南草坊、マタギ八郎太郎、南蔵坊を主人公とする伝説です。(全集第四巻154～157頁)

■八郎潟…真澄は、八郎潟周辺での記録に、神として祀られている八郎太郎について触れています。十和田湖で南蔵法師との争いに敗れて八郎潟に入り、八竜の社の祭神となつていること(《男鹿の秋風》、全集第四巻20頁)や、冬になると、住処として

いる八郎潟に厚氷が張るため、一ノ目潟に移り住むこと(《男鹿の春風》、全集第四巻212頁)を記録しています。

■田沢湖…真澄は、『仙北郡二十二』(全集第八巻193頁)にある次の記述で、田沢湖の伝説を間接的に伝えています。

玉池はむかしは大池であった。母と美しい娘が住んでいた。ある日娘が、獲った魚を焼いて食べた。喉が渴いて水を飲んだが、どうしても喉の渇きが止まず、玉池の水まで飲んだ。どうしたことかと水鏡を見ると大蛇になつていた。事の次第を母に語り、娘はこの池に身を潜めることになった。玉池明神の竜神として祭っている。この話は、植湖(うきき)のかた、田沢湖)の金鶴子の物語と同じである。【大仙市豊川字長楽寺】

県北部

■錦木塚の由来…《けふのせばのの》

白鳥のにこ毛を混ぜた狭布（毛布）を売る娘と、仲人木と呼ばれる錦木を売る若者が互いに恋しく思っていた。娘の家の門に錦木の束を立て、それが夜のうちに取り入れられていると、若者の気持ちを娘が受け入れたことになる。しかし、娘の育ての親である翁は、ことごとく二人の邪魔をした。やがて、若者は自ら命を絶ってしまった。娘も若者を思う余り、湯水さえ飲めなくなってしまうようになってしまった。翁は悔やんだが、もうどうにもできないので、一つの塚の中に若者が立てた千束の錦木とともに、二人の亡骸を一緒に入れた。

【鹿角市十和田錦木】



《けふのせばのの》、大館市立中央図書館蔵

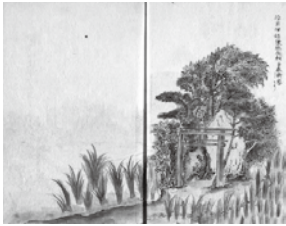
■三哲神社物語…《雪の秋田根》

医者の三徹（三哲）が、不作だったある年の秋、役人が年貢米を運ぶのを見て藩主の命令だと嘘を言いつつ止め、貧民にその米を分け与えた。そして、一身に罪を被って死罪となった。病がある人は、三徹を祀る社のある山に登って精進するとすみやかに治る。【大館市十二所】

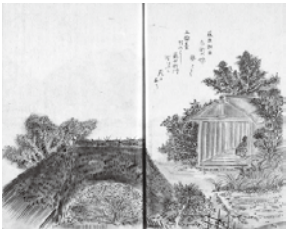


■藤原泰衡と妻との悲話…《にえのしがらみ》

藤原泰衡の最期については、真澄が平泉や蝦夷島にいた時から関心事でした。それは、義経を匿いながらも、やがては討つに至った泰衡の苦悩や心情に対する同情、それに伝説に彩られた義経の生涯についての関心の表れだったのかも知れません。贗の柵とも呼ばれた二井田（大館市）では、泰衡が河田次郎に討たれたとの話を聞きました。



【現在は錦神社、大館市二井田】



【現在は西木戸神社、大館市比内町八木橋】

県南部

《月の出羽路仙北郡》から

■「人見宇右衛門覚書（人見日記）」からの引用

（『舍惜録二篇』十所収、大館市立中央図書館蔵）
《仙北郡五》で河熊の御筒の物語を引用するなど、五箇所で四話を引用している。大館所蔵本には、「真澄考（ますみおもうに）」と二箇所にあることから、真崎勇助が真澄の手沢本を写したことが知られる。

引用箇所：《仙北郡五》全集第七巻191頁（《仙北郡七》全集七巻247頁と同内容、《平鹿郡十三》全集第六巻504頁、《仙北郡十七》第八巻32頁に二話

■『徳政夜話』からの引用

（展示は大館市立大曲図書館蔵・天地二冊）
真澄は《仙北郡》全二十五巻中、三箇所で徳政夜話について触れている。同書は、大館市立大曲図書館（二冊本）、大館市立中央図書館（三冊本）、秋田県公文書館（七冊本）の所蔵本が知られている。真澄が書き写した伝説は、大曲蔵本と公文書館蔵本に見られるが、大館蔵本には見られない。そのことから、『徳政夜話』にはいくつかの系統があったことが知られる。

引用・関連箇所：《仙北郡一》全集第七巻20頁、《仙北郡六》全集第七巻212頁、《仙北郡二十五》全集第八巻272頁

《雪の出羽路雄勝郡》から

■はなびこ面のいわれ



図絵は《勝地臨毫雄勝郡五》

《雄勝郡三》

大滝山観音寺泉光院は、真言宗で一乗院の末寺である。本尊は地藏大士。化け物が出るので長く無住であった。僧が住み、ある夜半に起き出してみると、二つの仮面があった。これを化け物の正体だと考えて、その仮面を火に焼いた。残った一つがはなびこで、今も本尊のそばにある。

【湯沢市泉沢】

《雪の出羽路平鹿郡》から

■弥重郎滝の名の由来



《平鹿郡十一》

弥重郎という妙術使いは、竜を使って雨を降らせることができた。谷地ハケ村から雨を降らすように頼まれて山に登ると、山伏たちも雨乞いをしているところだった。今すぐ雨を降らすことができるという弥重郎を山伏たちは笑ったが、弥重郎の予言通りに雨が降った。弥重郎は村人からお礼に金品をもらったが、その全てを人に分け与えて、自分は粗末なものを食べていた。

【横手市平鹿町醍醐】

寄贈図書

(平成24年2月～平成25年1月)

- ◆東北芸術工科大学東北文化研究センター「まんだら第49・50・51号」「季刊東北学第29・30号」◆田口昌樹「あきた浪漫第29・30・31・32号」「いわな第142・143・144・145」「秋田県謎解き散歩」◆さいかちの会「金野本哥道極傳秘書 水戸本手耳葉口傳」◆奈良女子大学日本アジヤ言語文化学会「叙説第39号」◆男鹿市菅江真澄研究会「男鹿五風(会誌第18号)」◆全国菅江真澄研究会男鹿大会◆菅江真澄研究会「菅江真澄研究第76・77・78号」◆(株)レマン「トランヴェール2012 8月号」◆小野努「菅江真澄が記録した自然災害」◆大石淳「安城民俗」他

※寄贈図書は、スタディールムで御覧いただけます。

表紙解説

「杉山清光院家譜」(部分、全体は一五・八センチ×七一センチ)／横手市大森町・大友克己氏蔵

企画コーナー展「真澄と秋田の国学者」で、当館では初めて展示紹介した資料です。真澄の筆致の特徴がよく出ているため、一目見て真澄の自筆資料と判断しました。一・四センチ角の印章は、同じく横手市大森町所在の「鉢位山神社縁起」(卷子)と「三狐専女牟良佐伎明神由来」(軸装と似ていますが、印影がわずかに異なります。内容は、《雪の出羽路平鹿郡五》に書かれているものの、本資料の前後は、家譜としてまとめられた表現になっています。

杉山清光院家譜 出羽ノ国平鹿ノ郡八沢木ノ郷木根阪に杉山といふあり。むかしはいや茂りたる杉群なりしかばしかいへり。此処に一字の仏刹あり。清光院といふ。修験者也。其昔は羽黒派にて、一世別行山伏たりしが、今は東山の流れをくみ、世々の補任もてり。家譜などは回禄失せて鼻祖の由来それと伝らねば、延宝の金剛院を中興の祖とせり。其補任三云、院号之事、授與 金剛院、右任先例令免許之状仍如件。寛永寺学頭凌雲院兼羽黒山執行別当僧正胤海印。補任、羽州仙北八鷲郷金剛院子葉王院、元禄九丙子年八月五日、羽黒山執行云々。三世金剛院、宝暦十三年、補任当山桜本坊、先達云々。世義寺云々。四世補任、寛政二年五月八日、清光院円山坊とあり。五世、当住杉山ノ清光院円龍坊也。是大友氏の領内にて百菊の稲田を寄附らる。なほゆゑよしあれど、これを省しぬ。文政七年甲申霜月尽(真澄印)

企画展「新着・収蔵資料展」真澄部門

内田武志資料の紹介

2012.12.15～2013.4.7

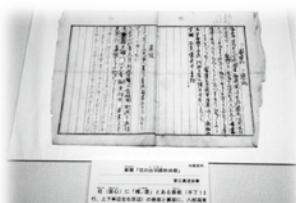
平成24年は、真澄研究の第一人者であった内田武志が亡くなって三十三回忌の年でした。内田は真澄の膨大な著作を順序づけて、記録の持つ意味を考察続けました。現在の真澄研究の多くは、内田の業績に依拠しています。当館の「内田文庫」から紹介しました。



4. 研究者との交流



1. 真澄研究のはじめ



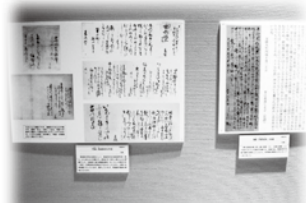
5. 「内田文庫」の遺墨資料



2. 内田武志の業績



6. 業績への評価



3. 失われた資料

編集後記

・今年度開催した企画コーナー展3回、企画展「新着・収蔵資料展」真澄部門では、各4頁の解説資料を発行した。館内印刷の粗末なものだが、展示内容についてはそちらが詳しいので御覧いただきたい。展示のたびに新たな課題、お伝えしておくべき事柄がたくさん出てくる。センターだより「かなせのさと」でもお伝えしているが、遅筆のために追いつかないのも現状だ。遅くなって時機を逸したことも何度かある。気長にお待ちいただければ、真澄をめぐる学習にはお役に立てるかと思う。併せて御覧いただきたい。(松山)

真澄 MASUMI No.30

発行日◎平成25年3月15日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足場崎字後山52
TEL.018-873-4121 (代)